

# テレビと都市空間—テレビ・ドキュメンタリーにみる東京イメージの変遷（2012）

## Television and Urban Space: The Representations of Tokyo on Television Documentaries (2012)

松山 秀明<sup>1</sup>

Hideaki MATSUYAMA

<sup>1</sup>東京大学大学院学際情報学府 The University of Tokyo Graduate School of Interdisciplinary Information Studies,

**要旨**・・・本稿は、テレビ・アーカイブを用いたテレビ番組の通時的な研究である。過去のテレビ番組に着目し分析することで、マス・コミュニケーション研究で語られてきた従来までのテレビ研究から脱却し、新たなテレビ研究を試みる。本稿では特に、テレビ・ドキュメンタリーが描く「東京」の都市空間の変遷を記述している。ここから明らかにされるのは、(1)下層からみる東京（1950年代後半～60年代前半）、(2)局地化する東京（1960年代後半～80年代後半）、(3)表象不可能化する東京（1990年前後～2000年代後半）という3つのフェーズのなかで語られてきた東京の姿であった。

**キーワード** テレビ・ドキュメンタリー、アーカイブ、東京論、都市社会学

### 1. はじめに

インターネットなどの電子通信技術が隆盛し、テレビの衰退もしくはインターネットと放送の融合論が叫ばれるようになって久しい。けれども、衰退が叫ばれるのとは裏腹に、近年、テレビに関する研究が盛んになってきた。逆説的だが、「テレビの衰退が叫ばれるようになること」と「テレビに関する研究認識が立ち上がること」が、現在、同時に起こっている。

その理由のひとつとして、テレビ番組に対する保存の認識が芽生え、アーカイブの整備が整いつつある現状がある。現在、日本において、NHKアーカイブスや放送ライブラリーなど、テレビ番組を収集・保存・公開する具体的な制度や仕組みが整いつつある。たとえば「NHKアーカイブスの学術利用に向けたトライアル研究」が2010年より開始されるなど、テレビ番組を「貴重な文化的資産」として再評価しようとする動きが、新しいテレビ研究を促進させている<sup>1)</sup>。しかし、それでもなお、日本においてまだテレビ研究が盛んであるとは言い難い。NHKアーカイブスの動きはまだほんの一例にすぎず、キー局や地方各局のテレビ・アーカイブの研究利用は、いまだ認められていない。世界に目を向けてみれば、特に、フランスのINA (Institut National de l'Audiovisuel、フランス国立視聴覚研究所) は、収蔵点数もさることながら、公開の体制が充実している。約400万時間にも及ぶアーカイブをINAthèqueで研究利用できるという仕組みは、テレビに関する博士論文数の増加として表れ、1994年には51本しかなかった博士論文が、2006年には260本へと約5倍に増加している<sup>2)</sup>。いまだ番組内の引用として制作者向けに閉じている日本の映像アーカイブのあるべき姿が、INAにはあると言えるだろう。

そこで本研究では、日本ではまだ例の少ない、テレビ・アーカイブを利用したテレビ番組研究を行うこととしたい。本研究は、主にNHKアーカイブスを用いて、通時的なテレビ番組研究を行う。具体的には「東京」をその設定とし、「東京（都市空間）」という側面から見る、テレビ・ドキュメンタリー番組の通時的な研究を行った。テレビが日々変化していく東京という都市空間をどのように捉え、どのように指標してきたのか。テレビはどのように東京を「描き」、また「描いてこなかった」のか。本研究の目的は、「東京」という変数からテレビ番組を通時的に考察することにより、テレビ・ドキュメンタリーによる「東京へのまなざし」の変遷を明らかにすることにある。

## 2. テレビと東京の相関

### (1) 先行研究概略——テレビジョンとは何か

日本におけるテレビ研究は、主に、「マス・コミュニケーション研究」の系譜のなかで発達してきたという歴史を持っている。つまり、日本におけるテレビ研究は、当初より「マス・コミュニケーション研究」のなかで新聞や雑誌の延長として扱われ、その「効果」や「影響」に関する調査研究が主流であった。これは、日本のマス・コミュニケーション研究の先駆をなした東京大学新聞研究所や NHK 放送文化研究所のテレビ研究に顕著に表れた。こうした調査研究は、テレビ研究の一側面（社会心理学的な側面）からしか捉えきれていないことが指摘され、よりテレビ番組そのものに真摯に向き合っていく必要性を訴えた議論も展開されている<sup>3)</sup>。近年の「カルチュラル・スタディーズ」や「記号論」による日本でのテレビ研究の新しい試み<sup>4)5)6)</sup>は、いままでの「マス・コミュニケーション研究」の一部としてとどまらない研究群であると言えるだろう。だがしかし、過去のテレビ番組を「文化的資産」としてとらえ返すことができるようになった今だからこそできる、「テレビを歴史的に語ることへの可能性」が、これらのテレビ研究でも未だに検討されているとは言い難い。たとえ近年のテレビ研究が新しい試みがあったとしても、それらが一様に着目しているのはテレビ番組の「共時性」である。したがって本研究で目指されるべきは、いままでのテレビ研究の「共時性」から脱却し、テレビ・アーカイブに縦糸を通すことでテレビ研究の「通時性」の獲得を試みることである<sup>7)8)</sup>。

### (2) 研究対象

本研究の対象は、「番組タイトルに“東京（TOKYO、トウキョウ）”もしくは“東京の地名”を含むテレビ・ドキュメンタリー」とした。ここにおけるテレビ・ドキュメンタリーとは、『日本の素顔』（1957~64）、『新日本紀行』（1963~82）、『ドキュメンタリー』（1971~78）、『NHK 特集』（1976~89）、『NHK スペシャル』（1989~）といった NHK においてシリーズ化されているテレビ・ドキュメンタリーを主に想定することにする。

本研究の研究対象における問題点は2つである。第一に、研究対象番組のほとんどが NHK（日本放送協会）制作の番組であるという点である。言うまでもないことだが、NHK をテレビの一般として語ることはできない。本研究において、NHK を中心的に扱ってしまうのは、現在 NHK アーカイブスが最も整備／公開が進んでいるという、テレビ・アーカイブの事情からである。第二に、対象番組を、タイトルに「東京もしくは東京の地名を含むもの」と限定してしまっている点である。番組タイトルそのものに東京もしくは東京の地名を含んでいなくても、無意識的に東京を描いてしまう場合は当然想定される。むしろ、その「無意識的に描いてしまう東京」にこそ重要な東京表象が隠されている場合も有りうるであろう。しかし、本研究では、「無意識で描いてしまう東京」を含めると番組数が膨大になると同時に、選定基準が曖昧化し代表的な番組の抽出が困難になるという懸念から、番組タイトルに「東京もしくは東京の地名を含むもの」と限定している。

### (3) 本研究の分析枠組

以上をふまえて、本研究における分析枠組として、以下の二つの手順をとることにしたい。まず、いままでに、東京に関するどのような番組があり、それらの番組は東京のどこ(What)をどのように(How)記述しているのかを把握する。この第一の方法論は、番組と対象（東京）との関係性に着目しているという点において「対象への指標性」の問題系であると言える。

次に、なぜその時代において、テレビ・ドキュメンタリーが東京をこのような切り取り方をしたのかに関する次元を考察する。これは、なぜその時代にその番組が存在したのかという、テレビ・ドキュメンタリーの〈出来事性〉に関する次元であり、「番組の存在論」の問題系と言い換えることができる。前田愛<sup>9)</sup>や松山巖<sup>10)</sup>による文学と東京の先行研究を参考として、各時代の東京のなかで、それぞれのテレビ・ドキュメンタリーがいかに存在し、いかに作動していたのかといった存在論的問いが、第二の方法論の中心となる。こうした存在論的問いを考察していくにあたり、本研究では各時代における「東京に関する学（主に都市社会学において語られる都市論・東京論）」、あるいは当時のテレビをめぐる「メディア状況」、さらには「番組制作者たちの言葉」との対応関係のなかで問うていくことにした。

## 3. 下層からみる東京——1950年代後半～60年代前半

### (1) edge から描く東京

「東京」をキーワードに NHK アーカイブスを過去に辿ってみれば、1950 年代後半に放送されていた NHK 『日本の素顔』というテレビ・ドキュメンタリー・シリーズに行きつく。例えば、『日本の素顔 ガード下の東京』(1958)という番組では、ガード下という都市の一部分にしか過ぎない一画に、当時の大東京の縮図を読み解いていく。番組では、ガード下にある英会話学校、修理工場、居酒屋を映し出すと同時に、ガード下に住んでいる「バタヤ」に焦点を当てている。つまり、この『ガード下の東京』という番組において描かれる東京イメージとは、断片的にガード下の東京の実相を描きつつも、そこには都市底辺の人々が登場し、彼ら／彼女らを東京の「問題点」として描きだそうという視線が確保されている。同時期のその他の『日本の素顔』でも同様の構図が確認できる。したがって、1950 年代後半における東京へのまなざしは、「下層民へのまなざし」と等価であったとすることができる。

### (2) オリンピックと東京

1960 年代前半の東京は 1950 年代後半の東京とは、その描かれ方に差異が見られる。1960 年代前半では、東京を「下層民(異常民)」そのものを通して描いていこうとするまなざしが消失していく。ここから浮かび上がるのは、オリンピックを控えた 1960 年代前半における高度経済成長期の東京イメージの衝突であり、1960 年代前半という時代における東京イメージをめぐる政治性である。こうした東京イメージの転成は、岩波映画製作所によって制作された 2 本のテレビ・ドキュメンタリー番組『日本発見シリーズ 東京都』(1962)を比較することで確認することができる。『日本発見シリーズ』という、NET(日本教育テレビ、現テレビ朝日)で放送されていたこの地理番組で、『東京都』が、大幅な制作のやり直しを求められた。改定前の『東京都 1』は、東京の中心地である新宿、東京の中心部の政治経済を映した後に、それを支える労働者たちを描くという、ある程度の意味のつながりが意識されている。その一方で、改定後の『東京都 2』では、各シーンへと至る「意味の流れ」が希薄で、東京という街を、政治、経済、歴史などといった「機能面」から機械的に切り取ったパッチワーク的な番組となっている。そのため、改訂された『東京都 2』では、夜間労働者や地方上京者たちを描かなくなり、「下層から見る東京イメージ」が排除される。こうした描き方の背後には、2 年後に控えた東京オリンピックが関係していたであろうことは想像に難くない。1959 年に東京にオリンピック招致が決定してから、東京は「対世界」を意識し始め、急速に対外イメージの形成に関心を抱くようになったのである。

以上のように、1950 年代後半から 60 年代前半におけるテレビ・ドキュメンタリーは、一見対照的だが、下層民(異常人口)を取り上げるか否かといった問いで共通していた。1950 年代後半の東京では下層民を取り上げ、一方、1960 年代前半の東京では下層民を取り上げなかったという差異のみが存在し、そこには「下層の論理」とでも呼べる時代性を確認することができるのである。なお、本章に関しては、詳しくは松山<sup>11)</sup>を参照されたい。

## 4. 局地化する東京——1960 年代後半～80 年代後半

### (1) 問い返される東京の個性

1960 年代半ばになると NHK 『新日本紀行』(1963~1982)という紀行番組シリーズが登場する。このシリーズのなかで描かれる東京は、近代化との対比のなかで、その街の消えゆく「伝統」が紹介される。たとえば『新日本紀行 川辺の日だまり～東京・佃～』(1974)では、佃大橋という近代化との対比のなかで、佃煮、渡し船、獅子舞といった佃の街の「伝統」が描かれている。また『新日本紀行 高速ビルに光流れて～東京・池袋～』(1979)では、サンシャイン 60 という近代化との対比のなかで、アトリエ村、古くから伝わる民話、豊島親子読書会といった池袋の街の「伝統」が描かれている。前章の『日本の素顔』で描かれる東京においても、近代化との対比のなかで東京の都市空間が描かれていたが、『日本の素顔』では、近代化との対比のなかで、非近代的なもの(下層民)に言及し、東京のなかの問題点として指摘する「まなざし」を孕んでいた。その一方で『新日本紀行』では、近代化との対比のなかで、近代化により失われつつある街の伝統や個性へとその「まなざし」を向けている。したがって、『日本の素顔』と『新日本紀行』では、近代化との対比のなかで描かれる視点が異なっている。

### (2) 繰り返される新宿

また、1960 年代後半から 80 年代後半という時期は、「新宿」を舞台としたテレビ・ドキュメンタリーが繰り返

返し描かれる時期でもあった。つまり、先に考察した「問い返される東京の個性」の一方で、「繰り返される新宿」というもう1つの軸がこの時代にはあったのである。ちょうど新宿がテレビ・ドキュメンタリーの舞台として注目され始めた1960年代後半、新宿という街は、街全体が騒乱する時期にあった。『ドキュメンタリー 新宿～都市と人間に関するレポート～』（1970）はこうした時期に放送されたドキュメンタリー番組である。この番組には、明確なシーケンスが設定されていない。さまざまな人々の言葉の断片によって新宿の街が描かれている。この極めて「コラージュ的」な手法が、1960年代後半の新宿の気風を表現するのに適していた。

だが、こうした1960年代後半において見られた新宿の気風も、しだいに薄れていくことになる。それは、新宿西口に「新都心」として超高層オフィスビルが建設されていくのを契機としている。つまり、新宿西口に超高層化が実現していく新宿の街には、以前までのような若者たちが錯綜する場が消え、独特の都市空間を醸成する機会が失われていった<sup>12)</sup>。そして、新宿の街としての性格が転換していくのに合わせ、テレビ・ドキュメンタリーは、新宿を2つの位相として捉えながら新宿を繰り返し描いていくことになる。つまり、テレビにおける新宿イメージは分岐しながら、新宿という街を特権化していったのである<sup>13)</sup>。その分岐されたイメージとは、一つは「超高層化していく新宿のイメージ」、もう一つは「増埒化していく新宿のイメージ」であった。1970年代初めには薄れていった新宿の若者文化としての性格が、こうして2つの分岐する位相となって「発見」されていくことにより、新宿という街は特権化されていった。1960年代後半から80年代後半まで一貫して繰り返されたのが新宿であって、なぜ渋谷や原宿ではなかったのか。その答えは、新宿が西と東でまったく違う両義性をもちえたことが、大きく関係していたと言えるだろう。本稿で言えば、第4章から第5章へと接合させる格好の舞台が、新宿という都市空間であったのである。

## 5. 表象不可能化する東京——1990年前後～2000年代後半

### (1) 空間として描けない東京

1990年代前後以降の東京イメージは、空間として表象すること自体の困難に直面していく。つまり、従来までのような、東京を下層から表象したり（第3章）、東京にあるそれぞれの街の伝統から表象する（第4章）というような表象の図式では東京という都市を捉えきれなくなった。ここでは、こうした1990年前後以降の東京をめぐる事態を「表象不可能化」と呼んでいる。その象徴的な番組が『NHK スペシャル TOKYO スピード』（1989）という番組であった。この番組ではシーケンスを繋げるものとして、音楽による抑揚が設定され、番組を通してその抑揚が東京の「スピード」感を強調する。東京を語るうえで東京という街自体について言及する必要はもはやない。東京性は「どこでも」見つけることができる街として、この番組では表象されている。この番組をきっかけとした1990年前後の東京イメージが示唆しているのは、東京という地域性の表象が消滅したということ、つまり、東京が「表象不可能化」したという問いなのである。

### (2) アーカイブ化する東京

では、空間としての東京を描けなくなった1990年以降のテレビ・ドキュメンタリーは東京イメージをどのように生成していったのだろうか。1990年代以降のテレビ・ドキュメンタリーは主に2つの東京イメージを描くようになる。一つは「回顧としての〈東京〉」、もう一つは「他メディアが描く東京という〈東京〉」である。これら2つの東京イメージは、東京という街をその外部空間として描かなくても東京表象を可能にしたという意味で、〈いま・ここ〉を指標できなくなったテレビの一形態として認識することができる。これらは、テレビ・ドキュメンタリー自身が東京の〈いま・ここ〉を表象できなくなり、東京の「過去」を描くか、あるいは、他のメディアが描いた東京を「事後的に」描くようになったことを示唆しているのである。

これらの番組の存在論的問いは、以下の2つに集約できるだろう。第一に、1980年代後半はいわゆる「東京論ブーム」が起り、「江戸＝東京論」が隆盛した。これらは、江戸の都市空間と当時の東京の都市空間との「見えない接続」<sup>14)</sup>を確認する言説群として機能した。1980年代後半という時期は、「江戸東京論」と「世界都市・東京」というベクトルを真逆にした言説が混在していた時期であり、この「東京論ブーム」がもっていた側面が、90年代後半までの「回顧としての〈東京〉」の素地をなしたのである。

第二に、テレビはそれまで映し出していた外部空間を純粋に指標することをやめ、自らの内部空間を参照していくようになる。この過程をエーコは80年代半ばに「パレオ TV」から「ネオ TV」への移行として指摘した<sup>15)</sup>。

また、北田は『元気になるテレビ』の番組構図からテレビの《外部》の消失を読み取り、これを「純粹テレビ」と名付けた<sup>16)</sup>。

以上のように、「江戸東京論」と「世界都市・東京」という“東京イメージの表裏”と歩調を合わせるようにして、いままでフローとして「使い捨て」のメディアであったテレビが、ストックとして「再活用」のメディアとしての認識が立ち上がっていった。ここにおいて、東京論とテレビ論の両者が時を同じにして接続されたとき、「回顧としての〈東京〉」と「他メディアが描く東京という〈東京〉」という2つの東京イメージのパターンが現出していったのである。

### (3) アニメ化する東京

2000年代後半になると、特異なテレビ・ドキュメンタリー番組が登場する。それが、『NHKスペシャル 沸騰都市 第8回「TOKYO モンスター」』(2009)という番組であった。本番組の特徴はなんといっても、「アニメ」で東京が捉えられていることである。沸騰都市と名付けられた本シリーズのなかで唯一東京が、一部、アニメとして描かれた。東京がアニメでとらえられていくという事態は、SF映画『ブレードランナー』(1982)から『GHOST IN THE SHELL 攻殻機動隊』(1995)、『AKIRA』(1998)といったSFジャパニメーションへと流れる系譜のなかで理解することができる。こうした『ブレードランナー』以降の「思想」的な潮流が未来都市を暗いものとして認識するようになったとき、東京イメージは廃墟化し、アニメ化していった。つまり1990年代以降、陰鬱な未来都市のイメージを付与されていった東京は、アニメで一番捉えやすかったのである。以上の事柄を極端に集約すれば、「東京がアニメ化した」という仮説が立てられるかもしれない。2000年代の東京イメージは、「東京は東京として演出されるのではなく、むしろ、特別な場所的描写がなされない場合にそこが東京なのである」<sup>17)</sup>といったイメージが醸成する場として、アニメ＝東京というイメージが喚起させる場としての機能していたのである。

## 6. おわりに

以上のようにして辿ってきた「テレビ・ドキュメンタリーにみる東京イメージの変遷」から読み取れるのは、「テレビを通してみる東京」であると同時に、「東京を通してみるテレビ」という構図であった。つまり、集合的にテレビと東京との関係図を把握していくことは、本稿にて描いてきた東京イメージの変遷が、実は、テレビというメディアの変遷にも繋がっていたことに気づくことになるのである。東京という都市空間との対応関係のなかで考察されるテレビは、描く空間の位置を変化させながら、その変遷を辿ってきた。したがって、本研究において、「テレビを通して東京を把握するということ」は「東京を通してテレビを把握するということ」にも繋がっていく事柄として、付随的に検証することが可能になったのである。

従来までの多くのテレビ論・テレビ研究は、何らかの形でテレビを「批判」することで成立していた<sup>18)</sup>。それはマス・コミュニケーション研究しかり、カルチュラル・スタディーズしかり、である。だが、本研究で目指したのは、何らかの形でテレビの権力性を暴くことではなかった。テレビ番組を「文化的資産」とみなし、ある一定の固定的な視点の下、歴史のなかにテレビ番組を位置づけていくことであった。こうした問題関心のなかで、テレビ研究自体に風穴をあけるべく試みられた本研究は、新しいテレビ研究の試みの一つとして、テレビに関する研究の再布置を目指した試みの一つとして、一定の成果をあげることができたと言えるだろう。

## 参考文献

- 1) 丹羽美之 (2009) 「アーカイブが変えるテレビ研究の未来」『マス・コミュニケーション研究』第75号, pp.51-66.
- 2) 長井暁 (2008) 「デジタル映像アーカイブは何をもたらすのか——フランス「INA」の挑戦」『放送研究と調査』2008年7月号, pp. 48-59.
- 3) 日本放送文化研究所 (1996) 『文研50年のあゆみ』日本放送出版協会
- 4) 伊藤守・藤田真文編 (1999) 『テレビジョン・ポリフォニー』世界思想社.
- 5) 小林直毅・毛利嘉孝編 (2003) 『テレビはどう見られてきたのか』せりか書房.
- 6) 石田英敬 (2007) 「テレビ記号論とは何か」、日本記号学会編『テレビジョン解体』慶応義塾大学出版, pp.2-11.

- 7) 七沢潔 (2008) 「原子力 50 年、テレビは何を伝えてきたか」『NHK 放送文化研究所年報』第 52 号, NHK 出版, pp.251-331.
- 8) 桜井均 (2005) 『テレビは戦争をどう描いてきたか』岩波書店.
- 9) 前田愛 (1982) 『都市空間のなかの文学』筑摩書房.
- 10) 松山巖 (1984) 『乱歩と東京』筑摩書房.
- 11) 松山秀明 (2012) 「テレビ・ドキュメンタリーのなかの東京—1950 年・60 年の番組を中心に」『マス・コミュニケーション研究』第 80 号, pp. 153-170.
- 12) 吉見俊哉 (1987) 『都市のドラマツルギー——東京・盛り場の社会史』弘文堂.
- 13) 深作光貞 (1968) 『新宿考現学』角川書店.
- 14) 陣内秀信 (1985) 『東京の空間人類学』筑摩書房.
- 15) Eco.U (1985) “TV: La transparence perdie”, *LaGuerre du faux*, Grassert. (= 「失われた透明性」水島久光・西兼志『窓あるいは鏡』, 西兼志訳, 慶應大学出版, 2008, pp.1-25. )
- 16) 北田暁大 (2005) 『嗤う日本の「ナショナリズム」』日本放送出版会.
- 17) 森川嘉一郎 (2003) 『趣都の誕生——萌える都市アキハバラ』幻冬舎.
- 18) 中野収 (2003) 「テレビ論のはたしてきたこと」『AURA』第 157 号, pp.20-23.